

新潟西部地域 「新之助」生育情報 No.2

令和8年7月9日
巻農業普及指導センター

◎平年並の生育量を確保、飽水管理を徹底 ◎幼穂長を確認し、適期に適量の穂肥施用

【7月8日の生育データ(指標値比較)】

草丈 並、茎数 並、葉数の進み やや遅、葉色 並

区分	調査地点	移植日	草丈(cm)		茎数(本/m ²)		葉数(L)		葉色(SPAD)	
			本年値	指標比%	本年値	指標比%	本年値	指標差L	本年値	指標差
分施	岩室(普及)	5月16日	51	99	795	137	11.1	-0.4	35.1	0.6
全量基肥	巻	5月15日	52	100	570	98	11.1	-0.4	39.0	4.5
	岩室	5月6日	53	101	607	105	10.9	-0.7	29.1	-5.4
	潟東	5月10日	56	107	545	94	10.9	-0.6	32.9	-1.7
	中之口	5月10日	60	115	539	93	11.5	-0.1	37.2	2.7
	黒埼	5月11日	49	93	567	98	11.7	0.2	39.6	5.1
	西川	5月17日	51	98	583	100	10.4	-1.1	35.9	1.4
	にいがた西	5月7日	52	100	471	81	10.6	-0.9	30.5	-4.0
全体平均		5月11日	53	102	584	101	11.0	-0.5	34.9	0.4
指標値		5月15日	52		580		11.5		34.5	
近年値		5月13日	57		529		11.1		36.0	

※本年値は、調査日が基準日より2日早いため、日数調整後の数値。

※調査地点:JA新潟かがやき「越後中央」新之助研究会、JA新潟かがやき「みらい」新之助栽培研究会、普及センター気象感応は調査データ

※近年値はH29～R7までの平均値

【今後の管理ポイント】

- 分施栽培の1回目の穂肥施用時期は7月20～23日頃と予想されるが、ほ場毎に幼穂長を確認し、適期に適量を施用する。
- 水管理は、出穂期1か月前となったので、浅水の間断かん水から徐々に飽水管理に移行する。
- 水面施用粒剤での穂いもち防除は出穂20日前頃実施する。
葉いもちが発生したほ場では直ちに粉剤か液剤で防除する。7月2、6日に葉いもちの感染好適条件が確認されており、作付ほ場の発生状況を確認する。
- 紋枯病が前年多発したほ場では適期に防除を行う。

【収穫前までの栽培管理】

1 穂肥時期のめやす

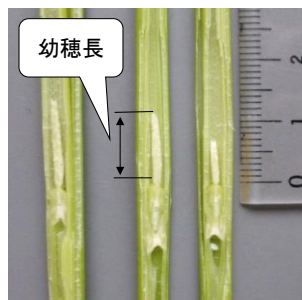
- 1回目穂肥時期は出穂期21～18日前で、幼穂長が5～10mmになった時期。
- 2回目穂肥時期は出穂期12～10日前で、止葉の葉耳（葉の付け根にある突起）とその下の葉の葉耳が並んだ頃（葉耳間長0cm）。

1回目穂肥時期のめやす

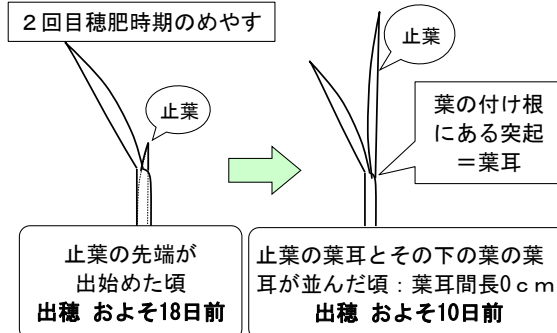


確認

幼穂長



2回目穂肥時期のめやす



2 穂肥量のめやす

(1) 分施栽培 1 回目穂肥

下図を参考に、幼穂形成期の草丈と葉色（SPAD値）から施用量を判断する。

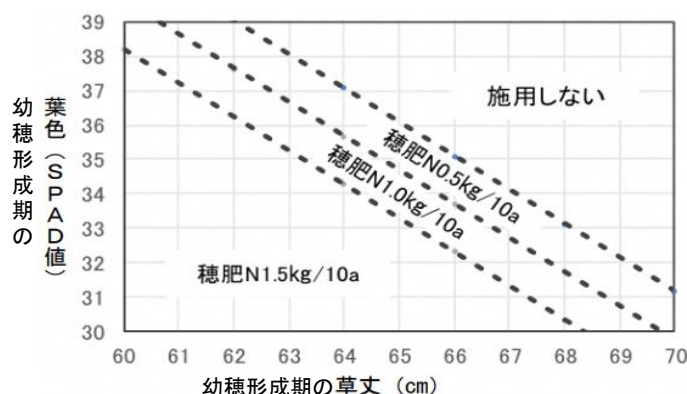


図1 適正な m^2 収数に誘導する1回目穂肥施用量の判断めやす

（作研センター：H29～R元）

注：めやすは幼穂形成期の茎数が300～750本/ m^2 の範囲で適用する。

(2) 分施栽培 2 回目穂肥

下表を参考に、葉色（SPAD値）から施用量を判断する。

表1 適正な出穂期葉色に誘導する2回目穂肥施用量のめやす（作研センター：H29～R元）

穂肥2回目施用時の葉色（SPAD値）	32.0未満	32.0～34.5未満	34.5～37.0未満	37.0以上
施肥窒素量(kg/10a)	1.5	1.0	0.5	施用しない

(3) 出穂期10日前以降の追加穂肥の考え方（分施・全量基肥栽培共通）

- 玄米タンパク質含有率を高め、食味の低下につながるのを、**出穂期10日前以降の穂肥は、原則、施用しない。**
- ただし、**出穂期3日前**（かつ、分施体系では2回目の穂肥から1週間以降）の、**第2葉（止葉の次の葉）のSPAD値が34未満で、登熟期間の高温が予想される場合は、追肥穂肥も検討する。**
施用量は最大で窒素成分1 kg/10aとする。

3 水管理

- 稲体は、幼穂形成期から出穂・開花期にかけて最も水を必要とするため、この期間に水が不足することのないよう、**飽水管理を徹底する。**
- **異常高温やフェーンが予想される場合は、急激な蒸散による出穂前の稲体活力の低下を防ぐため、速やかに湛水する。**ただし、長期間の湛水は避け、可能な限り**ほ場の水温上昇を抑えるためのこまめな水管理（水更新）**を行う。
- 早期落水は、品質・食味の低下につながる。このため、**通水最終日には十分にかん水し、出穂後25日頃までは飽水状態の維持に努める。**
また、登熟後半の土壤水分確保のため、気象状況をふまえ、できる限り暗渠栓を開ける時期を遅らせる。



写真1 飽水管理で水田の「足跡に水が残っている程度」

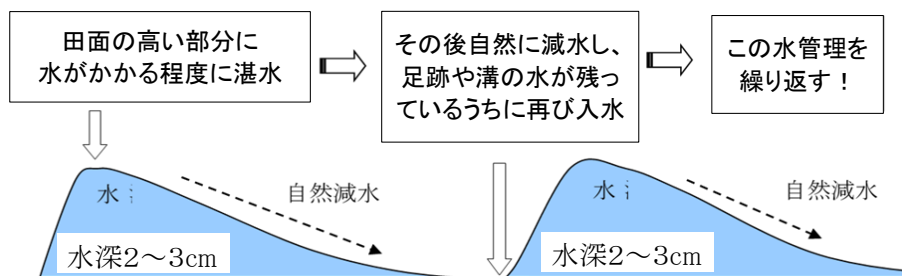


図2 飽水管理のイメージ